

幼稚園における歌唱教材と指導法について

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : Specific Materials and Methods for
Teaching Songs to Children Attending Kindergarten.

本研究では、幼稚園における歌唱教材と指導法について、幼稚園を対象に実施した質問紙調査を歌唱教材に関する年間計画がある幼稚園と年間計画がない幼稚園とで比較検討した。その結果、歌唱教材に関する年間計画がある幼稚園は、年間計画がない幼稚園よりも歌唱教材、幼稚園教諭の歌唱技能およびピアノ伴奏を重要視しており、さらに子どもの歌唱行動が活発であることが明らかにされた。併せて、歌唱教材の変遷について歴史資料を概観した。

キーワード：歌唱教材 年間計画 歌唱行動

1. 問題と目的

明治9年(1876)11月に創設された東京女子師範学校附属幼稚園の保育科目には「唱歌」が設置され、しかも幼児教育開始において緊要の一教科として導入された¹⁾。つまり、わが国の幼稚園教育における音楽教育は、唱歌教育によって開始されたのである。さらに、この唱歌教育は、開始時より伴奏楽器を付随して行われ、「楽器」を用いて「唱歌」を教えるというわが国独特の歌唱指導のスタイルはこの時から始まった。

幼稚園教育が開始されておよそ130年が経過し、子どもを取り巻く環境は時代とともに劇的な変化を遂げた。この変遷において、今日の幼稚園における歌唱教材および歌唱指導は、当然ながら大きく変化していることが考えられる。その反面、歌唱指導のために伴奏が不可欠に捉えられている現状は、唱歌教育開始以降、伝統的に継承されていると指摘できる。

このような問題意識のもと、幼稚園現場における歌唱教材がどのように捉えられ、指導がなされてい

るのか、幼稚園を対象に質問紙調査を行った。歌唱教材のジャンルと歌唱教材の選択に配慮される項目に関する分析の結果、今日の幼稚園現場で用いられている歌唱教材は、幼稚園成立時に扱われた唱歌教材から今日のJ-POPまで非常に多彩なジャンルが扱われており、時代に反映していることが明らかとなった。さらに、歌唱教材の選択には季節感にあふれていることが最も重要視されており、加えて、流行の歌やアニメソング、J-POP等を歌唱教材として用いている幼稚園の割合も多いことが確認された²⁾。

そこで本研究では、幼稚園における歌唱教材の捉え方と指導法に関して、歌唱教材に関する年間計画がある幼稚園と年間計画がない幼稚園とで比較検討を行う。さらに、幼稚園における歌唱教材の変遷を概観し、幼稚園における歌唱教材と指導法について考察する。

2. 方 法

2.1 調査対象と調査時期

鳥取県、島根県、兵庫県、大阪府、愛知県、東京都に所在する公立および私立幼稚園185ヶ所に質問紙を郵送し、そのうち110ヶ所（110人）から回答を得た。回答率は、59%である。調査時期は、2004年4月から6月である。

2.2 調査内容

質問項目内容は、次の9項目である。

1. 子どもの歌唱教材に関する年間計画がありますか
2. 子どもの歌唱教材をどの程度重要視していますか
3. 子どもの歌唱教材について、先生方でよく話し合いをされますか
4. 流行の歌やアニメソング、J-POP等を子どもの歌唱教材として用いますか
5. どのようなジャンルの歌唱教材をよく用いますか
6. 歌唱教材を選択するときに、どのような項目に配慮しますか
7. 幼稚園教諭にとって、歌唱技能はどの程度重要ですか
8. 子どもの歌唱行動を促すためには、ピアノ伴奏はどの程度重要ですか
9. 子どもたちの歌唱活動は活発ですか

項目2・3・7・8・9は、「とても重要である」から「重要ではない」とする5段階評定で回答を求め、項目4・5・6は、あらかじめ設定した項目の中から複数回答を求めた。

3. 結果と考察

3.1 歌唱教材に関する年間計画の有無

図1が示すとおり、歌唱教材に関する年間計画がある幼稚園（以下、年間計画がある幼稚園）の割合

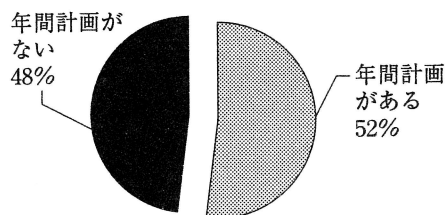


図1 歌唱教材に関する年間計画の有無

は52%であり、全体の半分に過ぎなかった。

3.2 歌唱教材の重要性に対する意識

図2で示すように、年間計画がある幼稚園の平均値は、年間計画がない幼稚園の平均値よりも圧倒的に高い（ $F(1, 107) = 13.39, p < .01$ ）。したがって、年間計画がある幼稚園は、年間計画がない幼稚園よりも歌唱教材を重要視している。

図3は、年間計画がある幼稚園と年間計画がない幼稚園における5段階評定の回答の割合を示している。

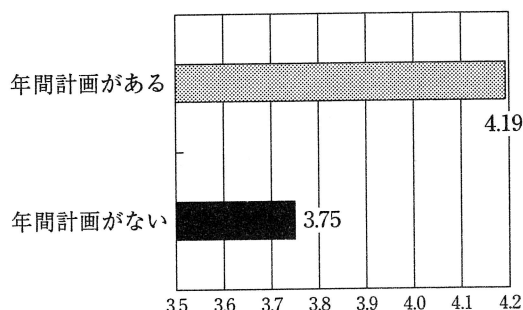


図2 歌唱教材の重要性に対する意識
(5段階評定の平均値)

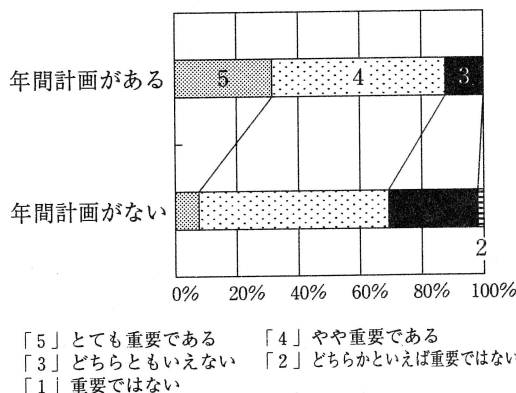


図3 歌唱教材の重要性に対する意識
(5段階評定の回答の割合)

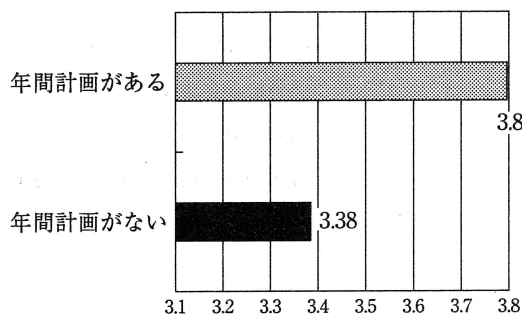


図4 歌唱教材に関する話し合いの頻度
(5段階評定の平均値)

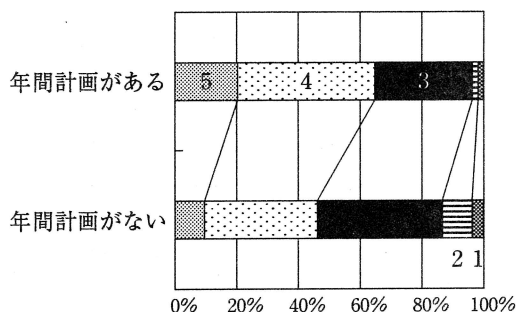


図5 歌唱教材に関する話し合いの頻度
(5段階評定の回答の割合)

る。「とても重要である」とする「5」段階と「やや重要である」とする「4」段階の上位群の割合は、年間計画がある幼稚園は全体の87.7%であり、年間計画がない幼稚園は全体の69.2%である。

3.3 歌唱教材に関する話し合いの頻度

図4で示すように、年間計画がある幼稚園の平均値は、年間計画がない幼稚園の平均値よりも高い($F(1,104) = 5.62, p < .05$)。したがって、年間計画がある幼稚園は、年間計画がない幼稚園よりも歌唱教材についてよく話し合いを行っている。

図5は、年間計画がある幼稚園とない幼稚園における5段階評定の回答の割合を示している。「どちらかといえば話し合わない」とする「2」段階と「ほとんど話し合わない」とする「1」段階の下位群の割合は、年間計画がない幼稚園は全体の13.5%、年間計画がある幼稚園は3.7%である。したがって、年間計画がない幼稚園のほうが、歌唱教材に関する話し合いがなされていない傾向にあると考えられる。

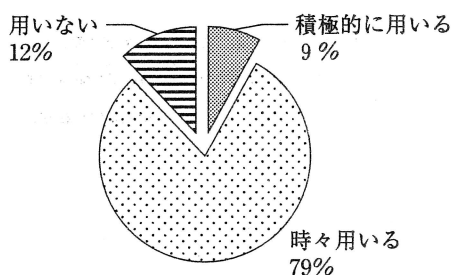


図6 年間計画がある幼稚園における流行の歌等を歌唱教材として用いている割合

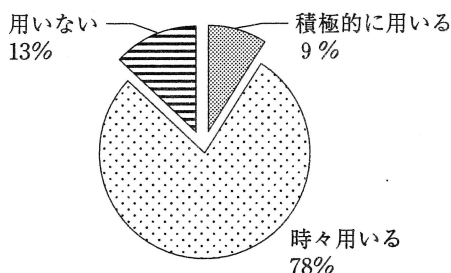


図7 年間計画がない幼稚園における流行の歌等を歌唱教材として用いる割合

3.4 流行の歌やアニメソング、J-POP等を歌唱教材として用いる割合

図6と図7は、年間計画がある幼稚園および年間計画がない幼稚園において、流行の歌やアニメソング、J-POP等をどの程度歌唱教材として用いているのか、それぞれ図示したものである。これらの結果、流行の歌やアニメソング、J-POP等を歌唱教材として用いる割合は、両者ではほぼ一致していることがわかる。さらに、両者ともに、流行の歌やアニメソング、J-POP等を歌唱教材として導入していることが指摘できる。

一方、流行の歌やアニメソング、J-POP等を用いない幼稚園の割合は、両者ともに全体の1割を占めている。これらの歌を用いない理由として、年間計画がある幼稚園では「美しくない」「言葉に心がこわわない」「ノリはよいが歌にくい」等の項目をあげており、年間計画がない幼稚園においても「ただ楽しければよいのではなく、一つの指導として捉えている」としている。

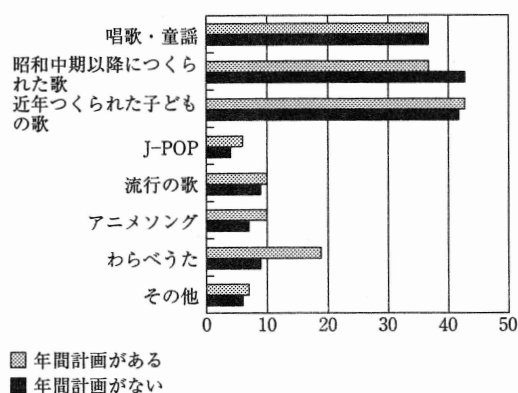


図8 歌唱教材としてよく用いられるジャンル

3.5 歌唱教材のジャンル

図8は、よく用いる歌唱教材のジャンルを設定項目の中から、頻度の多い項目を3つ回答してもらい、得点化して図示したものである。両者とも、近年シンガーソングライターによってつくられた歌唱教材が最も多く用いられており、次に昭和中期以降につくられた新しい子どもの歌、唱歌・童謡が多く用いられている。唱歌・童謡を選択する理由では、年間計画の有無にかかわらず、言葉の美しさや言葉の理解を深めるために唱歌・童謡を伝承したいとする目的が示されていた。しかし、わらべうたに関しては、年間計画がある幼稚園のほうが、年間計画がない幼稚園よりも歌唱教材として多く用いており、わらべうたを歌唱教材として明確に位置付けていることが考察できる。

3.6 歌唱教材を選択するときに配慮する項目

図9は、歌唱教材を選択するときに配慮する項目について、設定項目の中から3項目を回答してもらい、得点化して図示したものである。両者とも、季節感にあふれていることに最も配慮していることがわかる。

年間計画のある幼稚園では、歌詞・リズム、子どものイメージをふくらます等の項目が年間計画のない幼稚園よりも圧倒的に高い得点を示しており、一方、年間計画がない幼稚園では、行事にふさわしい、子どもの日常生活に密着している項目が年間計画のある幼稚園よりも圧倒的に高い得点を示してい

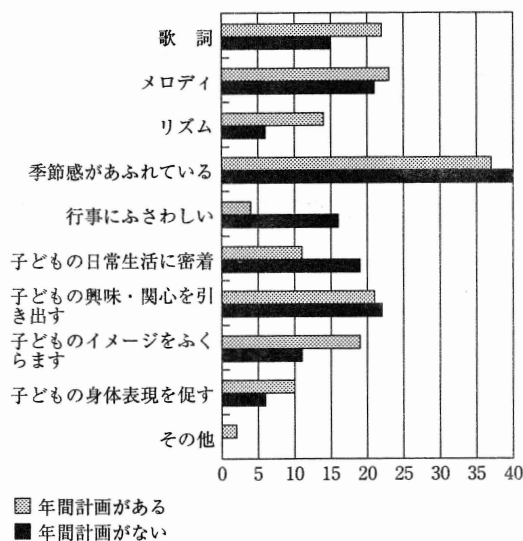
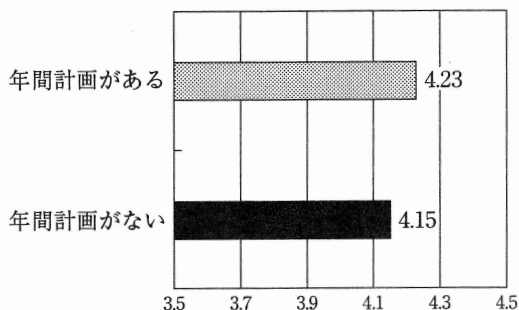


図9 歌唱教材を選択するための配慮項目

図10 幼稚園教諭の歌唱技能の重要性
(5段階評定の平均値)

る。つまり、年間計画のない幼稚園では、季節や行事および日常的な生活に即して歌唱教材を選択する傾向が見られる。一方、年間計画がある幼稚園では、歌詞、リズム、子どものイメージをふくらますことができるかどうかについて、歌唱教材の選択を具体的に検討していることが考察できる。

3.7 幼稚園教諭の歌唱技能の重要性

図10で示すように、両者の平均値から幼稚園教諭にとって歌唱技能が重要視されていることがわかる。両者間の平均値に有意差は認められなかった。

3.8 子どもの歌唱行動を促すためのピアノ伴奏の重要性

図11で示すように、年間計画がある幼稚園の平均値は、年間計画がない幼稚園の平均値よりも高い

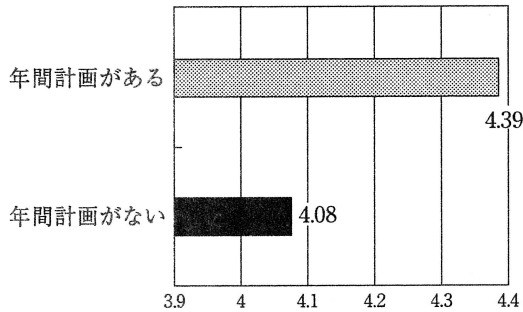


図11 子どもの歌唱行動を促すためのピアノ伴奏の重要性（5段階評価の平均値）

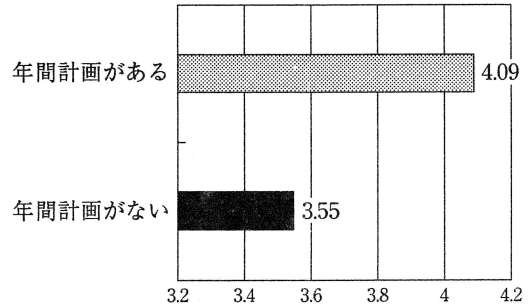


図13 子どもの歌唱行動が活発であるかどうか（5段階評価の平均値）

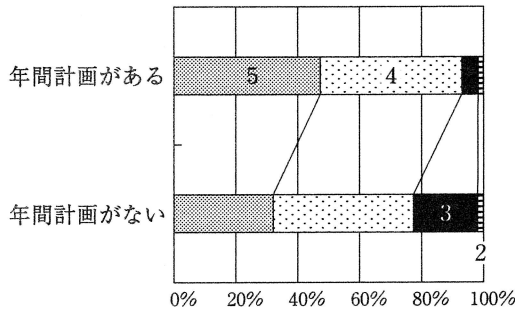


図12 子どもの歌唱行動を促すためのピアノ伴奏の重要性（5段階評価の回答の割合）

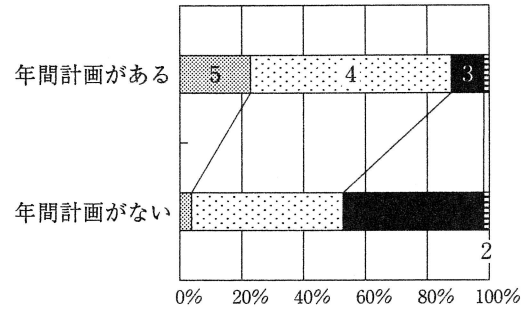


図14 子どもの歌唱行動が活発であるかどうか（5段階評価の割合）

($F(1, 108) = 5.00, p < .05$). したがって、年間計画がある幼稚園は、年間計画がない幼稚園よりも子どもの歌唱行動を促すためにはピアノ伴奏が重要であると捉えている。

図12は、年間計画がある幼稚園と年間計画がない幼稚園における5段階評価の回答の割合を示している。「とても重要である」とする「5」段階と「やや重要である」とする「4」段階の上位群の割合は、年間計画がある幼稚園は93.0%であり、年間計画がない幼稚園は77.4%である。

3.9 子どもの歌唱行動が活発であるかどうか

図13で示すように、年間計画がある幼稚園の平均値は、年間計画のない幼稚園の平均値よりも圧倒的に高い($F(1, 108) = 20.79, p < .01$)。したがって、年間計画がある幼稚園のほうが子どもの歌唱行動が活発であると言える。

図14は、年間計画がある幼稚園と年間計画がない幼稚園における5段階評価の回答の割合を示してい

る。「とても活発である」とする「5」段階の割合は、年間計画がある幼稚園が22.8%であるのに対し、年間計画がない幼稚園の割合は3.8%である。

以上が、歌唱教材および指導法に関して、年間計画がある幼稚園と年間計画がない幼稚園との比較検討である。次に、「歌唱教材を重要視している」「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」「ピアノ伴奏を重要視している」「子どもの歌唱行動が活発である」の4項目の相関関係を検定した。これらの結果を表1と表2で示す。

年間計画がある幼稚園において、「歌唱教材を重要視している」と「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」の評価の相関、「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」と「ピアノ伴奏を重要視している」の評価の相関、「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」と「子どもの歌唱行動が活発である」の評価の相関にそれぞれ中程度の相関が示された。

一方、年間計画がない幼稚園では、「歌唱教材を

表1 年間計画がある幼稚園の相関係数

	歌唱技能を重要視	ピアノ伴奏を重要視	歌唱行動が活発である
歌唱教材を重要視	.438**	.321*	.354**
歌唱技能を重要視		.433**	.417**
ピアノ伴奏を重要視			.378**

表2 年間計画がない幼稚園の相関係数

	歌唱技能を重要視	ピアノ伴奏を重要視	歌唱行動が活発である
歌唱教材を重要視	.447**	.233	.517**
歌唱技能を重要視		.514**	.396**
ピアノ伴奏を重要視			.195

**有意水準 $p < .01$ *有意水準 $p < .05$

重要視している」と「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」の評価の相関、「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」と「ピアノ伴奏を重要視している」の評価の相関、「歌唱教材を重要視している」と「子どもの歌唱行動が活発である」の評価の相関に中程度の相関が示された。したがって、両者ともに、「歌唱教材を重要視している」と「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」の評価の相関、および「幼稚園教諭の歌唱技能は重要である」と「ピアノ伴奏を重要視している」の評価の相関において中低度の相関が示されている。また、年間計画がない幼稚園の「歌唱教材を重要視している」と「ピアノ伴奏の重要性」の評価の相関係数は、年間計画がある幼稚園よりも高い結果が示された。

4. 幼稚園における歌唱教材の変遷（概要）

幼稚園における唱歌教材に関する記述を、1) 幼稚園教育が成立した明治期、2) 幼稚園教育の普及および幼稚園令が制定された大正期、3) 幼稚園を規定した学校教育法および保育所を規定した児童福祉法が制定された戦後改革期、4) 「保育所保育指針」が作成された昭和40年（1965）の4期に分けて示す。

1) 幼稚園教育が成立した明治期

東京女子師範学校附属幼稚園創設時の幼稚園保姆であり、わが国で最初の保育唱歌作成に取り組んだ

豊田英雄（1845～1941）が、明治12年（1879）に著した「保育の葉」に、唱歌教材に関する記述が見られる。

「唱歌なるだけ歌詞の解し易く、抑揚簡易なるを歌はしむべし。大人の面白く歌ふとも、児童は大人の如くならざれば拍子は四つ拍子にて曲節の活発なるものを撰ぶべし」³⁾

また、伴奏に関しては、芝葛鎮筆「保育唱歌墨譜」上（写本）の冒頭に次の記述が見られる。

「唱歌ノ歌ハ笏拍子ニ節ヲ拍子琴ニ声ヲ応和シテ調フ」⁴⁾

明治20年（1887）に刊行された「幼稚園唱歌集」では、拍子や調子に関する記述が見られ、さらに、伴奏楽器を要する記述が次のように明確に示されている。

「幼稚園ノ唱歌ハ、殊ニ拍子ト調子トニ注意セザル可ラズ。拍子ノ、緩徐ニ失スルトキハ、活発爽快ノ精神ヲ損シ、調子ノ高低、其度ヲ失スルトキハ音ニ音声ノ発達ヲ害スルノミナラズ、幼稚ノ性情ニ厭悪シ、其開暢ヲ妨グル恐レ特ニ此等ノ要旨ニ注意セリ」

「幼稚園ニハ、箏、胡弓、若クハ洋琴、風琴、ノ如キ楽器ヲ備エテ、幼稚ノ唱歌ニ協奏スルヲ要ス。是レ楽器ニヨリテ、唱和ノ勢力ヲ増シ、深く幼心ヲ感和セシムルノ力アルヲ以ッテナリ」⁵⁾

明治期では、文語調による保育唱歌であり、伶人たちによって洋楽の伝習と伝統音楽の折衷によって

つくられた。したがって、これらの保育唱歌には和楽器による伴奏が用いられている。しかしながら、小学唱歌集が刊行された明治14年（1881）以降、西洋楽譜が用いられるようになった背景や明治20年代にキリスト教主義の幼稚園の設立および幼稚園保姆養成によってピアノもしくはオルガンが普及している。

2) 幼稚園教育の普及および幼稚園令が制定された大正期

大正4年（1915）年から7年にかけて発行された「大正幼年唱歌」では、「幼稚園」「ピアノ」「お馬」「はたる」「汽車」「かくれんぼ」「虫のこゑ」「かたつむり」などの題目で示されているように、動物や乗り物、行事に関連した子どもの身近な素材が見られる。また、歌詞も、明治期の漢文調から子どもに理解しやすいことばへと変化している⁶⁾。

このことは、大正10年（1921）の「岡山市立幼稚園概要」の記述からもうかがうことができる。

「歌唱教材ノ材料ハ野卑ナルモノヲ避ケテ、幼児ニ興味アル高雅ナルモノヲ撰ビ季節或ハ談話遊戲トモ自然連絡セルモノニシテ心身ヲ快楽ニシテ徳性涵養ノ資タラシメ且発声及聴器ノ練習ヲナス以ッテ要旨トス」⁷⁾

同様に、歌唱教材の選択、歌詞の内容、歌曲の内容についても次のように記述されている。

「一、歌の形式 談話具体的ニシテ理解シヤスキモノ、同一ノ音若シクハ言語ノ反復セルモノニシテ幼児ノ自然性ニ近キモノ

二、歌詞ノ内容 幼児ノ思想ノ範囲内ニアリテ興味ヲ惹スルニ適セルモノ

三、歌曲ノ内容 音域ハ範囲狭小ニシテ高低ノ変化甚ダシカラザルモノ、同様ノ旋律ノ繰返サレシモノ、半音ノ少ナキモノ、拍子ハ二拍子若シクハ四拍子」⁸⁾

大正期は、土川五郎（1871～1947）によって律動遊戲の提唱がなされ、保育内容にリズム的な要素が加わっており、上記の記述においても、形式、歌詞、音域や反復による形式、半音の使用、拍子等が

具体的に示されている。

3) 学校教育法および児童福祉法が制定された戦後改革期

昭和22年（1947）、教育基本法および学校教育法が公布され、「唱歌」から「音楽」と「リズム」へと移行した。昭和23年（1948）に文部省から刊行された「保育要領―幼児の手びき」における「音楽」の項目では、歌唱教材について次のように記されている。

「歌は旋律の美しく明るく単純なもの。音域のあまり広くないもの。調子は長調とし、拍子は二拍子か四拍子を主としこれに三拍子のものを加える。中途で調子や拍子が変わるものや附点音符の多いものは避け、曲の長さは短いほどよく、八小節から十六小節どまりとする。音程の飛躍したものはいけない。発声は無理のない自然なものとする」⁹⁾

4) 「保育所保育指針」が作成された昭和40年

昭和31年（1957）の「幼稚園教育要領」の刊行によって「音楽リズム」が登場した。歌唱教材に関しては、昭和40年（1965）年度版「保母養成専門科目教授内容ソースブック」における「音楽リズム甲」および「音楽リズム乙」に歌唱の指導法に関して、歌い方の指導法、教材の選択、伴奏法、展開の4項目の記述が見られる。「音楽リズム甲」による記述は次のとおりである。

「歌い方の指導について

- ①児童の年齢や発達に応じた正しい発声（特に、頭声発声、変声期の処理等）について、基礎的知識や指導法を習得させる。
- ②適切な箇所でのブレスとフレージングの関連性について理解させる。
- ③児童の発声に適した姿勢について理解させる。
- ④児童の年齢や発達に応じた正しい発音の技術の指導について習得させる。
- ⑤児童の歌唱表現の指導に必要な楽典的諸事項や基礎的技術を習得させる。
- ⑥児童の歌唱の指揮法について実際を経験させ、習得させる。

⑦協同で作りあげる合唱の特性を理解させ、その指導法を習得させる。

⑧児童の年齢・発達に応じ、同声または混声の輪唱、合唱の指導法を習得させる。

教材の選択について

①児童の発達と教材の選択について指導する。

②幼児歌曲や学校教材からの選択について指導する。

③わが国や世界の歌曲や民謡からの選択について指導する。

④斉唱・輪唱・合唱曲の選択について指導する。

⑤テレビ・ラジオ・レコードからの選択について指導する。

伴奏法について

①伴奏の基礎的技法を習得させる

②独唱、または少人数の歌唱の伴奏法を習得させる

③合唱等、多人数の歌唱の伴奏法を習得させる

④伴奏の形態の種類について、その指導の基礎的技法とその要領を習得させる

展開について

①歌唱の指導は、他の領域との関連も考慮して指導すべきことを理解させる

②歌唱の相互鑑賞、歌によるゲーム、おどろ、合奏との協演、音楽劇、オペレッタへの展開の指導法について経験させ理解させる

③音楽会、学園祭その他、年中行事参加への理解と態度について指導する」¹⁰⁾

この記述内容から、「音楽リズム」指導のための基礎的能力・技術が保育者に求められていることがわかる。歌唱教材の選択に関しては、子どもの発達との関連が重視されており、加えて伴奏が重視されていることが示されている。

5. 総合考察および論議

わが国の幼稚園教育において、明治および大正期の保育内容では一貫して「唱歌」と「歌唱遊戯」が設置され、昭和期前半には「音楽」と「リズム」に

移行し、昭和31年に「音楽リズム」が登場した。「音楽リズム」では、子どもたちに指導すべき活動内容が具体的な項目として示されているように、昭和40年に作成された「保育養成専門科目教授内容ソースブック」においても子どもの歌唱指導に対する技術が強く求められている。このような技術を偏重した指導法や子どもの具体的な音楽経験内容に対して検討がなされ、領域「表現」が誕生した。したがって、幼稚園成立過程において、徳性の涵養という目的で唱歌教育が開始され、領域「音楽リズム」は子どもたちが達成することが望ましい音楽活動として示されたものの、特定の技能に偏ることがないようにと生活という枠組みの中に音楽的活動を捉える領域「表現」へと変化した。しかしながら、子どもの歌唱活動は、日常的な生活行為としての表現活動としても中心的存在であることに相違ない。

今回の調査結果では、年間計画の有無にかかわらず、幼稚園教諭の歌唱技能は非常に重要であると捉えられており、その反面、歌唱教材に関する年間計画がある幼稚園は全体の半数に過ぎなかったことが明らかとなった。年間計画がある幼稚園のほうが、年間計画がない幼稚園よりも歌唱教材を重要視しており、子どもの歌唱行動も活発となっている。同時に、ピアノ伴奏も重要視されている。この結果から、ピアノ伴奏を伴うわが国の伝統的な歌唱指導のスタイルが継承されていること、さらに歌唱教材に対する意識は強いにもかかわらず、実践的指導内容に関しては、幼稚園現場によって相違があることが指摘できる。また、大正期以降、歌唱教材は季節感が絶えず重要視されており、今日においてもこのことは同様であることが確認できた。

また、今回の調査結果から、唱歌・童謡が歌唱教材として多く扱われていることが確認されたが、保育者の年代層によって歌唱教材に対する捉え方に相違があることが明らかとなった。したがって、将来、唱歌・童謡が歌唱教材としてどのように伝承されていくのか不明確であり、幼稚園教諭の年代層の相違は、歌唱教材としての唱歌・童謡の捉え方に影

響するであろうと考える。さらに、近年のシンガーソングライターによる歌および流行の歌やアニメソング、J-POP等が歌唱教材としてますます導入されることも予想される。なぜなら、若い年代層の保育者は、近年つくられたリズムカルな歌唱教材を用いる傾向にあることが幼稚園現場で懸念されており、流行の歌やアニメソングが多く用いられている現状に対しても選曲が困難であるというという問題が示されていた。また、幼稚園で今日用いられているJ-POP等では、村尾（1998）が指摘しているように弱化モーラによる配字シンコペーション¹¹⁾のリズムパターンが子どもたちによって歌われており、これらの歌のリズムは複雑化し、テンポも速い傾向にある。歌唱教材のジャンルは、今後ますます拡大していくことが予想され、これらのリズムやテンポが歌唱教材に及ぼす影響は大きいと示唆できる。

一方、今日のピアノ伴奏が、子どもの歌唱教材をリズムカルな傾向に導いたことも指摘できる。細田（1993）は、子どものどなり声による歌唱の問題を指摘し¹²⁾、志村（2003）は、わが国の保育室の音環境について音圧レベルが高いことを指摘している¹³⁾。これらは、わが国の伝統的スタイルであるピアノ伴奏との関連によるのもであろう。

梅本（1971）は、歌唱教材の選択の重要性について次の項目をあげている。

- 1) 子どもが無理なく歌えるかどうか
- 2) 音域が子どもの声域内であるかどうか
- 3) 3歳児で中央の一点ホ音付近を中心とした五または六度くらいの音域のものであれば、大勢の子どもは無理なく歌える
- 4) 4歳児、5歳児になるとオクターブの音域をもつ旋律でも歌えなくはない
- 5) 歌詞は短く、その子どもの年齢の記憶範囲以内にあるものが望ましい
- 6) ことばが子どもに理解できるもの
- 7) リズムがとりやすく、自然に動作を伴うものが望ましい
- 8) 歌の内容がその年齢の子どもの気持ちにアピー

ルするもの¹⁴⁾

これらの項目が、歌唱教材としてはたしてどのように配慮され、歌唱教材に対する計画がなされているのであろうか。幼稚園における歌唱教材が多様性に富んでいる今日、子どもの声域、歌唱教材の音域に関してはすでに多くの研究がなされている。小川ら（1995）は、幼児と小学生6年生までの教材曲では音域に相違はなく、G4が音域の重心であることを明らかにし¹⁵⁾、今川ら（2002）は、子どもの声の多彩さとの可能性について述べている¹⁶⁾。

しかしながら、歌唱教材の内容と指導法に関しては、明確な情報がないことが指摘できる。喧騒と騒音による音楽環境においても、子ども歌唱教材の持つ意味は大きい。さらに、子どもの生活行為としての歌唱表現を促すためには歌唱教材をどのように捉えなければならないのか、また、子どもたちの歌唱行動をどのように支えなければならないのか、今後の検討が求められる。

付記

本稿は、筆者が日本音楽教育学会第35回大会（武蔵野音楽大学 11. 13. 2004）でおこなった口頭発表を再分析し、加筆修正したものである。

註

- 1) 湯川嘉津美「日本幼稚園成立史の研究」、風間書房、2001
- 2) 羽根田真弓「保育者養成機関および幼稚園・保育園におけるカリキュラム改革の影響と対応に関する動向調査—日本と韓国との比較をもとにして—」、鳥取大学大学院教育研究科修士論文、2005、pp. 94-96.
- 3) 文部省「幼稚園百年史」ひかりのくに、1979、p. 55.
- 4) 河口道朗「近代音楽教育論成立史研究」、音楽之友社、1996、p. 366.
- 5) 山住正巳「唱歌教育成立過程の研究」、東京大学出版会、1967、p. 114.

- 6) 日本保育学会「日本幼児保育史」, 第三巻, 1969, pp. 84-87.
- 7) 日本保育学会 (前掲書), p. 55.
- 8) 日本保育学会 (前掲書), p. 56.
- 9) 文部省 (前掲書), p. 558.
- 10) 厚生省児童家庭局編「保母養成専門科目教授内容ソースブック」, 1965
- 11) 村尾忠廣・疇地希美「90年代おじさんの歌えない若者の歌〜その2 —弱化モーラによる配字シンコペーションとおじさんの音楽情報処理—」, 『音楽情報科学』26—5, 1998
- 12) 細田淳子「子どもの歌唱について—どなり声に関する一考察—」『音楽教育学』, 第23号—2号, 1993
- 13) 志村洋子・甲斐正夫「保育室の音環境を考える (1)」『埼玉大学紀要』, 教育学部 (教育科学) 第47巻第1号, 1998
- 14) 梅本堯夫「情操と表現」『幼児教育学全集』第六巻, 小学館, 1971, pp. 191-192.
- 15) 小川容子・北山敦康・村尾忠廣・高田俊治「幼児・児童の歌唱教材における音域分布の調査研究—子どもの声域との比較を通して—」『音楽知覚認知研究』第一巻, 1995
- 16) 今川恭子・志民一成「「声」の再検討」『保育の実践と研究』第7巻, 第1号, 2002